

日本におけるサービス・ラーニングの展開(20)

—地域社会の生徒受け入れ団体への影響について—

Development of service learning in Japan part 20

— Impact on organizations that accept students in the community —

大東 貢生・柴田 和子・古川 秀夫・富川 拓

要 旨

この小論の目的は、東京都立高等学校で実施されている必修教科「人間と社会」において、地域社会で生徒を受け入れる団体がいかなるメリット・恩恵を得ているのかについて、A・B高校の3つの受け入れ団体に対するインタビューから検討することにある。結果、A高校の生徒受け入れ団体のメリット・恩恵については「啓発活動の充足」「活動のメリハリ」「精神的な充実感」が語られるが、生徒受け入れに対する思いについては、高校からの働きかけが弱いこともあり生徒に伝わっているかどうか分からない状況にある。一方、B高校の生徒受け入れ団体は高校生を受け入れることにより「私たちが想像できなかった多様性が期待でき」それは「まちや地域のつながりを創る」という。こうした違いを生徒受け入れ団体と高校を取り結ぶ中間支援団体の役割から検討した。

キーワード：メリット・恩恵、啓発活動の充足、精神的な充実感、多様性への期待、中間支援団体

1. 問題の所在

この小論の目的は、東京都立高等学校（以下都立高校）で実施されている必修教科「人間と社会」において、地域社会で生徒を受け入れる団体がいかなるメリット・恩恵を得ているのかについて、受け入れ団体に対するインタビューから検討することにある。都立高校では、2007（平成19）年度より東京都設定教科・科目「奉仕」を必修化し、2016（平成28）年度より教科「奉仕」を発展させた教科「人間と社会」を実施している。教科「人間と社会」の目標は「価値の理解を深める学習、選択・行動に関する能力を育成する学習、体験活動などを通して、道徳性を養い、判断基準（価値観）を高めることで、社会

的現実と照らし、よりよい生き方を主体的に選択し行動する力を育成する」（東京都教育委員会 2016）とあり、体験活動として学校外にある地域社会のさまざまな団体と連携して活動することでこうした力を育成することが目標となっている。

こうした体験活動はサービス・ラーニング（以下SL）として考えることができる。SLとは地域社会のニーズに応じた社会貢献活動に学習者が実際に参加・参画することで、地域社会に対する責任感等を養う教育方法である（山田明 2006）¹⁾。教科「人間と社会」において展開されているSLも地域社会において生徒を受け入れる団体との連携によって実施可能となるものである。SLはFurco(1996)や逸見敏郎(2017)によれば、学習者と受け入れ側双方にメリット・恩

恵があるとされる。それでは生徒を受け入れる地域の受け入れ団体にはどのようなメリット・恩恵があると考えられているのであろうか。

一方、学校と地域社会との連携の議論としては文部科学省が推進するコミュニティ・スクール施策（以下CS）も関連する。CSは地域住民が学校と連携することによって、地域住民の個人的な有用感や生きがいに加え、学校を中心とした地域ネットワークや絆の創出につながる事が期待されている。文部科学省によれば、CSは地域学校協働本部の設置を通じ、学校教育と社会教育の協働による「生涯教育社会」という地方創生を担うものと提言されている（文部科学省 2018, 大東貢生2018, 2019）。

CSの枠組みを援用すれば、都立高校の教科「人間と社会」であるSLによる学校と地域社会の受け入れ団体との連携は、CSに類似するものとして、地域ネットワークや絆の創出につながる可能性があると言えよう。したがって以下では、都立高校2校での受け入れ団体との事例を取り上げ、地域社会での生徒受け入れ団体のメリット・恩恵をまとめつつ、地域ネットワークや絆の創出の可能性について検討を加えたい。

2. 先行研究の整理

以下では、生徒を受け入れる地域社会の受け入れ団体のメリット・恩恵についてまとめたい。筆者らはこれまでに国立情報学研究所の雑誌論文データベース、CiNii Articlesにおいて、「サービス・ラーニング」「地域」「連携」もしくは「サービス・ラーニング」「社会」「連携」をキーワードとして検索を行った43件の雑誌論文の分析結果をまとめている（富川他 2020）。SLは最初アメリカでのSLの紹介および日本への展開可能性について展開され、次に日本において具体的な取り組みのために必要なシステムの構築がなされ、大学における実践報告の増加とともにSLと大学全体の教育目標、学生・生徒

の学びに関するより効果的な学習システム、地域側のメリット・恩恵についての検討が増加する。その後多様な実践報告による、大学と地域の協働マネジメント、教育システム、地域への恩恵それぞれについての深化した議論がなされている。

しかし、これらの議論のほとんどは大学の事例であり、高校の事例は宮崎猛(2001)、池田和博(2015)、福原充(2017)のみであり高校でのSLの展開についてはほとんど研究されていないようである。

その中で地域社会の受け入れ団体のメリット・恩恵に関する研究としては以下のものがある。高畑幸・伊藤泰郎(2008)は大学でのフィールドワークの一環で集めた在住外国人に関するデータを、自治体の外国人住民施策に生かすことを述べている。片桐徹也(2010)はSLによって地域の課題が可視化され、地域住民が主体となって行政とともに公民連携が促され「新しい公共」が促進していく可能性を指摘している。時任隼平ら(2015)は受け入れ担当の地域住民を対象とした質問紙調査と半構造化インタビューから、SLによって地域社会にかつて存在した行事や住民間の交流が一時的に復活し地域社会に対する持続願望につながることをまとめている。

山田直子(2016)は地域住民に対するアンケート及びインタビューから、「普段しづらい作業を処理できた」「外部と交流し地域の現状（人材や資源）を再認識した」「地域力を高めるきっかけになる」「20代の若者との交流」「解り合えた」と言う経験が「刺激」となる」とまとめている。さらに進藤こずえら(2017)は、地域連携における副次的な効果として、学校支援ボランティアでの「若い力が得やすい」「若い世代とのふれあいによる子どもの安全・心のケア」が「地域問題の解決」に結びつくことを取り上げる。堀出雅人(2017)は、SLによって地域住民も学びのコミュニティを運営するリーダーシッ

ブを獲得すると述べている。

こうした先行研究からは、SLによる地域社会の受け入れ団体のメリット・恩恵としては「若い世代とのふれあい」「地域の現状の再認識」「地域の持続願望」が地域での「リーダーシップの獲得」や「新しい公共」につながる可能性があるとまとめられる。これはCSによる地域ネットワークや絆の創出の可能性ともつながる議論である。

3. 生徒受け入れ団体への調査から

では都立高校での地域社会の受け入れ団体のメリット・恩恵はどのようなものなのであろうか。都立A高校の生徒受け入れ団体である点訳サークルと環境サークル、A高校の教科「人間と社会」中間支援団体、都立B高校の生徒受け入れ団体であるホームレス支援団体、B高校の教科「人間と社会」中心支援団体に2017年9月から12月に半構造化面接法によりインタビューを行った。以下斜字はインタビューの記録であり、丸かっこ内は著者が補ったものである。

3. 1. A高校の生徒受け入れ団体の語りから

A高校の生徒受け入れ団体である点訳サークルは視覚障害者団体の広報誌や総会等の展示による資料作成と学校で点字を教えるという啓発活動を中心に行っている。点字教育について現在は活動地域にある複数の小学校・中学校・高校で点訳の活動をしている。実習はA高校からの受け入れ要請がきっかけであり当初はA高校の中間支援団体を經由して行われていたが、その後高校から直接連絡が来るようになったという。この啓発活動について、会の代表者はその目的を次のように語る。

「点字というものを、必要とする人がいるんですよということを教える」

「(点字を必要としてる人を) 知って欲し

いというのを通して、その先のすべての障害を持っている人に、優しくなって欲しいかなと思って。視覚障害者だけではなくて、いろんな障害を持っている人がいるので。基本的にはそういう人達に対して優しくなってくれたら。勉強が出来る出来ないの問題よりもそっちが優先されていいのかな、という気持ちでやってます。」

このように点字をきっかけにしてさまざまな障害者にやさしくなってほしいという思いがあると語るが、生徒が実際に点字を通じてどのように思っているのかについては次のように語る。

「(教える) 時間が短くなったので(生徒の思いを) 聞く時間がなくなってしまったんです。前は「どうでした? と聞く時間が持てたんですけど。今は3回になってしまったので仕上げるだけで精いっぱい。今は聞いている時間がありません。」

「(授業の感想が) ずっと来てたんですけど、来なくなったの。」

教科「奉仕」が教科「人間と社会」に発展したことにより、各高校では「人間と社会」のテキストによる学校内での学習が必要となり、結果として実習の時間が減少している。そのため点訳サークルの点字教育においても時間が4回から3回となり、以前は授業中に直接聞くことができた生徒の思いを現在は聞くことができない状況にあると語る。また授業の感想も授業内においてまとめる時間が取れなくなっており、感想も分からない状況にある。こうした状況を学校側に伝えているのかについては、次のように語る。

(著者：そういった会としての要望を、高校に伝える機会というのはあるんですか?)

「ありません。簡単にあっさりと（今年も点訳指導を）やってほしいという連絡があるだけで。」

以上から、A高校の生徒受け入れ団体である点訳サークルは生徒に点字を通じてすべての障害者にやさしくなってほしいという思いを持ちつつも、生徒がどのように思っているのかについて確認することがなく、こうした思いがあることをA高校に伝えないままになっているようである。すなわち、会としても目的である点字の啓発活動はA高校では活動としてはできているが、成果としては分からない状態にあるようである。

一方A高校の別の生徒受け入れ団体である環境サークルは、古布や古毛糸のリユースとして小物を作成しバザー等で販売する等の活動をしている。実習はこの環境サークルが元々は活動として行っていた牛乳パックを使用した紙すきによる絵葉書作成である。環境サークルにおいても生徒の受け入れはA高校からの要請がきっかけである。環境サークルについても当初は中間支援団体を経由して依頼があったが、最近は直接依頼があるようになったという。環境サークルとしての生徒に対する思いを会の代表者は次のように語る。

「私はいつも言うのは、帰りの時に言うのは、エコってものね、今、物は便利な世の中になって100円も出せばいい物いっぱい買えるけれども、そうでなくてそういった捨てられる物の中でもこれだけ利用出来る物、人の心を豊かにする物があるから、それをみなさん心の中にしまっただけで。活用して欲しいということは言います。」

こうした捨てられるものの中にも人の心を豊かにするものがあるから、それを活用してほし

いという思いに対して、生徒が受け止めることができたのかについては次のように語る。

「（生徒は始まってから数年間は）必ずお礼状を寄こしました。お礼状にして、それをポスターにしてくれる子もいればね。最近はないです。」

（著者：高校の方で、教科「人間と社会」に変わり（実習の）時間数が少なくなってお礼状を書く時間が段々少なくなっている。そういったお話しは高校の先生からは伺ってないですか？）

「ないです。（お礼状をお送りしますので、授業で取り組んでいますので、みたいな話しは打ち合わせで）全然ない。」

というように環境サークルでもまた、先の点字サークルのようにお礼状が届かなくなったが、高校側からの説明はなかったという。ただお礼状に関しては次のようにも語る。

「でも別に要らないです。最初来た時、やっぱり子供たちも緊張していますよね。作っていったんだんだ顔がねよい顔になっていくんですよ。自分で一生懸命これやって、おばあちゃんばかりから教えてもらって。それで使ってる道具も、それこそその辺にある棒を使ったりでしょ。それがだんだん仕上がっていくに従って、よい顔になっていくんです。それで彼ら今日一日来てよかったなって、私は思います。それを持って帰ったらお家の人に、今日これ作ったって絶対言うと思うんです。すばらしいでしょ。」

と牛乳パックを材料にして紙すきによって絵葉書を作ることで、普段捨てていたものから絵葉書が出来上がっていくことがやり切った達成

感につながっていると語る。一方、環境サークル自体の生徒受け入れのメリット・恩恵としては、次のように語る。

「これは私個人(の意見)になっちゃうかもしれませんが。年に1回のイベント。サークルにとってのメリハリです。だからその間だけは、紙すきやるからこれをちぎろうとか。そういった普段しない仕事を出来るということ。」

「(メンバー) がとっても優しくなります。孫に教えるみたい。優しくなりますよね。だからお互いに精神的にいいんじゃないですか。」

というように、年に1回の生徒を受け入れる活動が、団体の活動のメリハリやメンバーの精神面でのメリットを上げているという。

まとめると、A高校の生徒受け入れ団体である環境サークルは、捨てられるものの中にも人の心を豊かにするものがあるから、それを活用してほしいという思いについて高校側から確認することはできないが、実際の生徒との活動の中で生徒の変化から見出しているように見受けられる。また、生徒の活動自体は環境サークルにとって活動のメリハリや精神的な満足につながる可能性があるといえよう。

以上から、A高校の生徒受け入れ団体のメリット・恩恵については点訳サークル、環境サークルでは「啓発活動」「活動のメリハリ」「精神的な充実感」が語られる。生徒受け入れに対する思いについては、高校からの働きかけが弱いこともあり点訳サークルは生徒の成長が分からず、環境サークルは実習に来た生徒の様子で判断しているようである。

3. 2. B高校の生徒受け入れ団体の語りから

B高校の生徒受け入れ団体であるホームレス支援サークルは、路上のホームレスを毎週夜に

訪問しホームレスの人たちへの声掛けを通じホームレスの人たちの生活を支える活動を行っている。生徒の受け入れは地域のボランティア連絡会での活動時にB高校側から働き掛けがあったことによる。

「特に高校生に路上訪問来てっていっても、なかなか一般的には未成年の方というのは参加しづらいイメージがあった時に、高校のプログラムの一環としてこういう分野を(高校側が)視野に入れてくれるというのは、むしろ私たちからしたら「サポートするから一緒にやろうよ」と。

こうしたことから活動が始まるが、このことによる受け入れ団体側のメリット・恩恵として次のように語る。

「私たちからしたら関わってもらえるメリットは非常に大きい。私たちが今まで想像できなかった多様性が期待できる点」

「例えば路上訪問に来る人というのはかなり覚悟をして来ちゃうんですね。社会の圧倒的な層の人たちからすると、相当意識の高い人たちが来る。高校生の方が授業で来ると、本当にはっとする、びっくりするようなことを言う。「何でホームレスずっとしてるんですか？」って、ストレートに出てきたりして。普段の参加者からは出て来ない言葉なのでびっくりする。私たちもどこかでタブーを作ってたのかなって。そういう意味では高校生ならではの、授業の一環として参加してくれることの意外性というか。思わぬものをもたらしてくれるというか。分かっていたつもりでも改めて気付かされるところはあります。

このように、ホームレス支援サークルが想像

できなかった多様性が期待でき、それが実際の活動で見えているという。そのことは当サークルに「私たちが想像できなかった多様性が期待でき」それは「まちや地域のつながりを創る」というメリットがあったという。つまりB高校のホームレス支援サークルでは高校生を受け入れることによって十分なメリット・恩恵があると語られている。

4. まとめに代えて

以上のようにA・B高校の3つの受け入れ団体のメリット・恩恵を見てきた。A高校の生徒受け入れ団体のメリット・恩恵については点訳サークル、環境サークルとも「啓発活動の充足」「活動のメリハリ」「精神的な充実感」が語られる。生徒受け入れに対する思いについては、高校からの働きかけが弱いこともあり点訳サークルは生徒の成長が分からず、環境サークルは実習にきた生徒の様子で判断しているようである。対してB高校の生徒受け入れ団体であるホームレス支援団体でのメリット・恩恵は「多様な人々にホームレス支援を知ってもらう」ことである。そのことは当サークルに「私たちが想像できなかった多様性が期待でき」それは「まちや地域のつながりを創る」というメリット・恩恵であるという。

これら「啓発活動の充足」「活動のメリハリ」「精神的な充実感」「多様性への期待」「まちや地域のつながりを創る」というメリット・恩恵は、第2章の先行研究での展開とどのように重なるであろうか。「若い世代とのふれあい」は上記の生徒受け入れ3団体に見られたが「地域の現状の再認識」「地域の持続願望」はホームレス支援団体でのみみられている。さらに、地域での「リーダーシップの獲得」や「新しい公共」もホームレス支援団体で見られている。

このように先行研究の視点から整理をしても、A高校の受け入れ団体とB高校の受け入れ団体

には違うがあるようである。。その違いの一つとして高校と生徒受け入れ団体をつなぐ中間支援団体に注目したい。中間支援団体とは生徒受け入れ団体との間に立ち、高校への生徒受け入れ団体の紹介や、高校や生徒受け入れ団体の要望を相互に伝え合う機能を持っている。A高校、B高校とも最初は中間支援団体からの紹介で生徒受け入れ団体を探している。

A高校の中間支援団体は当初に団体を紹介した以上の積極性はみせておらず、高校と生徒受け入れ団体との議論の場を提供していることにとどまっている。対してB高校の中心支援団体は高校と地域の受け入れ団体との橋渡し役として高校と受け入れ団体による会合を年に複数回持ち、積極的に活動を行っている。つまり中間支援団体の活動が、両高校の生徒受け入れ3団体のメリット・恩恵の差に表れていることが示唆される。中間支援団体が生徒受け入れ団体と高校のとの間でどのような活動を行うかが、生徒受け入れ団体のメリット・恩恵に関与し、高校と生徒受け入れ団体を含む新たな地域ネットワークや絆の創出を生み出すことが示唆される。したがって、こうした中間支援団体に類似するものとして、中間支援団体や生徒受け入れ団体を構成員としてCSを展開すれば、文部科学省の謳う学校を中心とした地方創生の可能性を探ることができるのではないと思われる。

ところでこれらの議論は、2つの高校の3つの生徒受け入れ団体へのインタビューでの展開に限られている。今後は受け入れ団体へのインタビューを増やすとともに、中間支援団体へのインタビューも行い、より一般的な議論を展開したい。

注

- 1) SLの定義は多様であり、唐木清志(2010)によればアメリカ国内においてもいまだ明確には定まっていないという。日本においても櫻井政成(2007)や佐藤豊(2008)が述べているよう

にSLの定義や解釈は多様であるとされる。この小論ではこのことを持って暫定的に定義を行っている(富川他 2007, 2020)。

- 2) SLに類似するものとしてアクティブ・ラーニング(以下AL)やプロジェクト/プロブレムベースドラーニング(以下PBL)での地域社会の受け入れ団体へのメリット・恩恵も取り上げたい。ALは2012年の文部科学省中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」において「学生同士が切磋琢磨し、刺激を受け合いながら知的に成長することができるよう、課題解決型の能動的学修(AL)といった学生の思考や表現を引き出しその知性を鍛える双方向の授業を中心とした質の高いものへと転換する必要がある」(文部科学省 2012)として提唱されたものであるが、2014年中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～」での大学入試改革・高大接続改革、2016年中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」では初等教育から高等教育までの一貫した教育システムの構築が謳われ、「アクティブ・ラーニング」という用語が「主体的、対話的で深い学び」と言い換えられ新しい学習指導要領に導入することが盛り込まれる。すなわちALは初等教育から高等教育までが目指すべき教育法とされている(大東 2021a)。

こうしたALさらにPBLにおいても学校外での活動には地域社会の受け入れ団体との連携が必要とされるが、SLと同じく大学教育における地域社会や受け入れ団体のメリット・恩恵の考察がほとんどである。ALにおいては、学生を受け入れる地域社会のメリットとして先行研究では「学生の頑張りに地域の人々が奮起される」「地域資源が再認識される」「さまざまな人々との交流が生まれる」「地域資源を維持する意欲が増大する」(大東・全 2019)、PBL型の実習科目では行政職員の語りからは、「学生と異世代交流することが地域の人々の張り合いになる」「地域のよさの再発見や伝統文化の継承につながる」「学生をサポートし学生との協働関係が生み出される」「自分たちで地域のこと

を考えるきっかけになる」(大東・徳井 2020)というメリット・恩恵があるとまとめた。

しかしPBL型の実習科目での地域住民の語りからは第一に何のために学生を受け入れるのかの目的意識が地域の受け入れ団体に希薄になりがちであったこと、第二に大学が学生を地域に送り込む目的あるいは大学生が地域で活動する目的が分からず、地域の受け入れ団体側にも学生を受け入れることによるとまどいが見られる。さらに、こうした状況で学生を受け入れを行うことによって、地域の受け入れ団体の人々は主観的には地域への影響はないと語っている(大東 2021b)。

まとめるとSLやALでの地域社会の生徒受け入れ団体の影響は先行研究では「若い世代とのふれあい」が「学生と異世代交流することが地域の人々の張り合い」となり「学生の頑張りに地域の人々が奮起され」「自分たちで地域のことを考えるきっかけ」になることで、「地域資源を維持する意欲が増大する」「地域資源が再認識される」「地域のよさの再発見や伝統文化の継承につながる」といった「地域の現状の再認識」「地域の持続願望」につながり、「地域のさまざまな人々との交流が生まれ」たり「学生をサポートし学生との協働関係が生み出される」といった新たな関係性を生み出し、地域での「リーダーシップの獲得」や「新しい公共」を創造することが想定されている。ただし、地域の受け入れ団体からの姿勢によっては地域社会への影響がほとんどないことも想定されるようである。

また、学校外での地域社会の受け入れ団体への積極的な影響のためには、授業に関わる教員が地域社会と積極的に関わり授業をコーディネートする必要があるのかもしれない(大東 2021c)。

文 献

- 福原充, 2017, 「大学教育における社会連携の一考察: 立教大学におけるサービスラーニングに注目して」『立教大学キリスト教教育研究所紀要』(35), 113-132.
- Furco, A., 1996, *Service Learning: A Balanced Approach to Experiential Education.*, *Expanding Boundaries: Service and Learning*, Cooperation for National Service.

- 池田和博, 2015, 「家庭・地域との連携システムの構築と児童の学びに関する研究—コミュニティ・スクール構想とサービス・ラーニングの視点から—」『愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院) 修了報告論集』(6), 421-430.
- 逸見敏郎, 2017, 「サービス・ラーニングが目指すもの」, 逸見敏郎・原田晃樹・藤枝聡著『リベラルアーツとしてのサービスラーニング』北樹出版.
- 片桐徹也, 2010, 「地域大学が関わる地域経営システム」『多摩ニュータウン研究』(12), 137-141.
- 唐木清志, 2010, 『アメリカ公教育におけるサービス・ラーニング』東信堂.
- 宮崎猛, 2001, 「社会参加学習を取り入れた選択「政治・経済」の試み—アメリカ「サービス・ラーニング」の実践をてがかりにして」『早稲田教育評論』15 (1), 111-129.
- 文部科学省, 2012, 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申)』.
- , 2014, 『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について—すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために—(答申)』.
- , 2016, 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』.
- , 2018, 『コミュニティ・スクール 2018—地域とともにある学校づくりを目指して—』.
- 大東貢生, 2019, 「学校を中心とした地域活性化の可能性について—コミュニティ・スクールとソーシャル・キャピタルの関係から—」『佛大社会学』(43), 34-44.
- , 2020, 「学校を中心とした地域活性化の可能性について」
- 南丹市美山町でのコミュニティ・スクールの展開から—」『佛教大学総合研究所紀要』(27), 65-78.
- , 2021a, 「アクティブ・ラーニングと大学改革に関連した研究の動向」『総合研究所成果報告論文集』(8), 印刷中.
- , 2021b, 「授業での学生の活動が地域社会に与える影響—受け入れ団体の語りから—」『総合研究所成果報告論文集』(8), 印刷中.
- , 2021c, 「授業での大学の活動が地域社会に与える影響について—A市での活動を事例にして—」『総合研究所成果報告論文集』(8), 印刷中.
- 大東貢生・全炳昊, 2019, 「授業を通じた学生の活動による「地域のメリット」とは?—大学におけるアクティブ・ラーニングの影響に関する研究に向けて—」『佛教大学総合研究所紀要』(26), 93-102.
- 大東貢生・徳井公樹, 2020, 「授業での学生の活動が地域社会に与える影響について—行政職員に対する語りから—」『佛教大学総合研究所紀要』(27), 37-49.
- 櫻井政成, 2007, 「地域活性化ボランティア教育の進化と発展: サービスラーニングの全学的展開を目指して」『立命館大学高等教育研究』(7), 21-40.
- 佐藤豊, 2008, 「リベラルアーツ大学ICUにおけるサービス・ラーニング」『体験的な学習とサービスラーニング』, 7-12.
- 新藤こずえ・金子充・関水徹平・田中秀和・川本健太郎, 2017, 「地域における大学生の学びの意義と課題: 先進事例の検討から」『立正大学社会福祉研究所年報』(19), 89-118.
- 高畑幸・伊藤泰郎, 2009 「国際社会コース「地域国際化論」の可能性」『現代社会学』(9), 219-235.
- 時任隼平・橋爪孝夫・小田隆治・杉原真晃, 2015, 「過疎地域におけるサービス・ラーニング受け入れに関する研究」『日本教育工学会論文誌』39 (2), 83-95.
- 富川拓・大東貢生・古川秀夫・山田一隆・柴田和子, 2020, 「日本におけるサービス・ラーニングの展開 (16) —サービス・ラーニングと地域連携・社会連携との関連から—」『聖泉論叢』(27), 53-66.
- 富川拓・柴田和子・大東貢生・古川秀夫, 2007, 「サービス・ラーニングの研究と実践をめぐる諸課題」『佛大社会学』(32), 9-18.
- 山田明, 2006, 『サービス・ラーニング研究 高校生の自己形成に資する教育プログラムの導入と基盤整備』学術出版会.
- 山田直子, 2016, 「多文化サービス・ラーニング導入に関する予備的考察: 佐賀市三瀬村との連携・協働事例をもとに」『佐賀大学全学教育機構紀要』(4), 137-152.

付記

本報告は、2019年11月に開催された第71回関西教育学会大会（開催校：関西学院大学）での報告を加筆修正したものである。また科学研究助成（15K03892, 18K01980）による研究成果の一部である。

（おおつか たかお
佛教大学社会学部准教授）

（しばた かずこ
龍谷大学社会学部兼任講師）

（ふるかわ ひでお
龍谷大学国際学部教授）

（とみかわ たく
聖泉大学人間学部准教授）